

# オール電化・雨月物語

青柳碧人

ブッポースウ

1、

コンビニの開かない自動ドアの前で、おおしまゆめの大島夢乃は茫然と立ち尽くしている。

マカベイ・マート おんせせ荻関三丁目店 営業時間：朝十時～夜十一時。  
(今どき、夜十一時に閉まる?)

店内は真っ暗で、つい五時間前にその前を歩いていたちんれつ陳列棚の商品すべてが寝静まっているようだった。最寄りの駅からこの店の前のバス停まで、バスで二十分かかった。近くを走っているタクシーもなさそうだ。

びゅうう、と風におそ襲われ、思わず首をすくめた。マフラーもコートもない。

あすか明日香に謝って、朝まで部屋にいさせてもらおうか。そう考えたけれど、すぐに思い直した。あんな女の顔なんて、もう見たくもな

い。

とぼとぼと、深夜二時の知らない街を歩きはじめる。土臭い畑が広がる中に、たまに家屋があるくらいで、ネットカフェや深夜営業の飲食店など絶望的だ。五十メートル間隔の街灯の明かり以外は、何もない闇。もちろん人影などなく、宇宙に放り出されたほうがまだましだと思えるくらいの心細さだった。

「あれ？」

右手側に長いブロック塀が続いている。塀の向こうに、黒くて細長い石がいくつも見えた。墓地らしい。……幽霊の類を信じるわけではないけれど、気味が悪い。

やはり引き返そうか、と立ち止まったところで、

どっ、どっー、どっ。

何かが聞こえた。

どっ、どっー、どっ。

(鳥の声？ だけど、こんな夜中に鳴く鳥なんている？)

辺りを見回すが、塀の中の植え込みに鳥の姿など見えない。

どっ、どっー、どっ。

二音節目だけ高い。面白いリズムと音程だ。何か言葉を与えたいと、創作意欲をくすぐられる。

しばらく耳を澄ませたけれど、その声はもう聞こえなかった。

びゅうう、とまた風が吹いた。とにかく朝まで過ごせるところを探さないと。

とそのとき、百メートルほど向こう、墓地の敷地の中に佇む、二階建てほどの大きさの四角い建物が目に付いた。道路に向かつて、明るい光が漏れている。近づいていくと、ぐわんぐわんと機械音が聞こえてきた。正面までやってきて、建物の正体が判明する。

《BPSランドリー》と書かれたガラス戸の向こう、奥の壁に大きな全自動洗濯機が五台並んでいて、大きなテーブルを挟むように座り心地のよさそうな三人掛けソファが向かい合っている。

引き戸を開いて一步入ると、湿度の高い暖気が夢乃を包んだ。

どこか不自然な解放感を覚えながら引き戸を閉め、ソファに腰を下ろした。洗剤と柔軟剤の臭いに満たされていて、蒸し暑い気もするけれど、外よりはだいぶましだ。人もいないし、夜明けまで過ごすのも文句は言われないだろう。

助かった……ほっとするとともに、全自動洗濯機が気になった。右端の一台だけがぐわんぐわんと大きな音を立てて動いている。違和感があるのはその大きさだ。

丸いハッチ式の蓋は夢乃の部屋にある全自動洗濯機と同じくらいの高さだが、高さが五メートルくらいあるのだった。

天井を見上げて、夢乃はやっと、この建物に入ったときの解放感

の正体をつかんだ。外から見ていたときからわかっていたけど、天井までが二階建ての建物くらいの高さがあるのだった。すべて、この巨大な全自動洗濯機を収容しておくためらしい。

(なんなのこの巨大な洗濯機……)

洗濯機に取り付けられたモニターには「乾燥中」とあり、その下に、「nextたため10分」とあった。それを見てピンときた。乾燥した洗濯物をたたんでくれる、フォルダー機能付きの洗濯機だ。

そういえば以前、知り合いの音楽プロデューサーが購入した話していた。乾燥した洗濯物の形状を把握はあくさせるため、一枚一枚いったん内部でふわっと舞い上がらせる。そのため建物二階建てぶんの高さはどうしても必要で、それなりに大きい家じゃなきゃ買えないんだぜ——と自慢していたっけ。

(それにしても、畳むところまで機械に任せようなんてねえ)

洗濯機の最下部に取り付けられた「取り出し口」という引き出しを見ながら、と夢乃は呆れるあき。こんなに大きなスペースを洗濯機に占められるくらいなら自分で畳んだほうがまだ。

洗濯機の観察あに飽き、出入口のほうに目をやる。反転した、《BPSランドリー》の文字。

(BPS……運営している会社の名前？ 何の略だろう?)

B、P、S、と頭の中で繰り返しているうち、さっきの鳥の鳴きな声

が思い出されてきた。ちょっと口にしてみようかと、クリエイター  
心に火が付く。

「びっ、ぴー、えす」

リズムはいいけど、語呂は悪い。別の母音を当ててみよう。

「ぼっ、ぱー、しゃう」

なんだかちよつと汚らしい音だ。しゃー、じゃなくて、そー、にし  
てみようか。

「ぶっ、ぼー、そう……うん、これだ！」

バッグの中からタブレットを取り出し、作曲アプリを起動させる。  
ジャックを差し込んでイヤホンを耳に装着し、【女性1】の音声で『ぶ  
っぼーそう』と打ち込んだ。

まずはレギュラーのメロディー加工で再生してみる。

ぶっ、ぼー、そう ぶっ、ぼー、そう

いい感じだ。電氣的な響きに仕上げようか。いや、ボサノバはどう  
だろう？ ゆったりしすぎか。それならジャズアレンジ……。こう  
して曲作りに没頭していると、時間はあつというまに過ぎていく。  
始発のバスの時間なんてすぐにやってくるはずだ。

\*

夢乃が浜地明日香と知り合ったのは、高校二年生のときだった。クラス替えですぐ近くの席になった。お互いに人見知りだったけれど、なんとなく話すようになって、共通の趣味があることを知った。Vチューバーとしての動画投稿。普段は人前でしゃべるのが苦手でも、顔を出さず声を変えてパソコンの前でしゃべるのは、二人とも好きだったのだ。

明日香が「しいちきん」という名前で運営しているチャンネルを初めて見たとき、夢乃は愕然とした。ピンク色の髪の毛のしいちきんはしぐさも言葉選びも何もかも可愛らしく、登録者数も夢乃の百倍を上いた。

何にもまして衝撃を受けたのは、しいちきんⅡ明日香が自作の曲をアップしていることだった。メジャーなバンドやボカロ製作者がリリースするようなポップな曲調のものもあれば、ピアノやバイオリンの音を使ったクラシック調のものもあった。聞けば明日香は、子どもの頃からピアノを習っており、作曲の知識は体に染みついていて、親には内緒だけだ。

「習わせたピアノをこういう活動に使っていると知ったら怒るだろうから、親には内緒だけだね」

そう笑う明日香が、ずいぶんスマートに見えた。同時に自分が卑小に感じた。夢乃は楽器を習った経験など一度もない。歌はそれな

りに好きだけれど、小・中と音楽の成績が特によかったわけでもなかった。

「私にも作曲、できるかなあ」

ダメもとで質問した夢乃に、明日香はある作曲アプリを紹介してくれた。それは、マイクに向かって鼻歌を歌うと、それを取りこんで音楽にしてくれるというものだった。ドラムのリズムもそれに合わせて入力できるし、楽器や電子音の種類も百以上あって無数のアレンジができるのだった。

夢乃はそれを駆使<sup>くし</sup>して、自分なりの音楽を作るようになった。初めのうちはまったくうまくいかず、作っては削除の繰り返しだったが、メジャーバンドのMVや、有名な製作者の動画を参考にしながら一か月、二か月とやっていくうち、自分でも「これはいいんじゃないか」と思えるものが出てきた。

恐る恐る明日香に聴かせてみると、

「いいじゃん!」

彼女は満面の笑みで言った。

「夢乃のチャンネルで流してみなよ」

「ええ……それは、恥ずかしいよ」

「じゃあ、一緒にやらない?」

コンテンツがマンネリ化してきて、誰か相棒が欲しいと思って

いたんだ、と明日香は言った。断る理由などどこにもなかった。

しいちきんのチャンネルは、「しいちきん・マスタード」と名前を改め、しいちきんとマスタードゆめのの二人体制となった。二人が世間で話題のことをひとしきりしゃべった後、それぞれの作った音楽を披露しあうというスタイルは人気を博し、登録者数もどんどん増えていった。

学校でも家でも地味な自分たちが、こんなに世間を楽しませてくれるんだ……そう思うと夢乃は背中に羽が生えたような気持ちになるのだった。

楽しい高校生活は、あつという間に終わった。

Vチューバー活動の傍<sup>かたわ</sup>ら予備校に通ってしっかり勉強していた明日香は、見事四年制大学に進学し、夢乃はブライダル関係の専門学校に進んだ。明日香のほうは忙しそうだったけれど、「しいちきん・マスタードチャンネル」はその後も週に二、三回の更新を続けた。これで生計を立てようとは思わないけれど、少なくとも学生のあいだは、この楽しいチャンネルを続けられる——夢乃はそう信じていたし、明日香もそのつもりだったはずだ。

しかし、新生活開始後わずか半年で、コンビは急に解散することになる。きっかけは、芸能事務所《イエローレイン》からのダイレクタメッセージだった。



——いつも楽しく拝見しております。貴チャンネルの音楽に大変興味がありますので、一度お会いできませんでしょうか。

明日香と二人、舞い上がった。予定を合わせ、《イエローレイン》本社まで出向くと、三十そこそこのスーツ姿の男性が現れた。

「本田ほんだと言います。主に新人ミュージシャンの発掘を担当しております」

運動部のマネージャーのように腰の低い感じで言うと、緊張している二人に向かって彼は動画をいつも見ているんだということを熱く語ってきた。初めは嬉しかった夢乃だけれど、そのうちあることが気になってきた。

本田は二人のチャンネルにあるいくつかの楽曲を褒めたほが、それらはすべて、夢乃の作ったものだった。明日香はそこには触れず、それどころか「音楽を学んだ人にはない発想なんですよね」「斬新ざんしんなんですよね」と本田に同意するような相槌あいつちを打っていたけれど、感情を抑えているのは明らかだった。

夢乃に作曲を教えたのは私なのに。私のほうがずっと音楽をわかっているのに。

後半、夢乃は明日香の心中が心配で、話をあまり聞けなかった。

後日、本田から連絡があった。

——またお話をさせていただけないでしょうか。今回は、大島さん

だけでけっこうです。

悪いな、という気持ちになかったわけではない。だが、初回の会社訪問で垣間見た、芸能の仕事の華やかさは心にこびりついて離れていなかった。

「当社は大島さんとだけ、お仕事を一緒にさせていただきたいと思  
います」

再び訪問した夢乃に、本田ははっきりと言った。

「明日香の曲はダメなんでしょうか？」

「ダメというわけではないんですが」 ゴムで作ったような慇懃さを  
本田は顔に浮かべた。「古いですよ。当社の必要としている才能で  
はないと申しますか」

もし契約してくれるなら売り出す予定のアイドルグループに何曲  
か提供してもらおうようになると、本田は言った。

その日のうちに、夢乃は明日香に相談した。

「え。よかったじゃん。やりなよ」

明日香は明るい表情で言った。自分の曲がどう思われているのか  
など明日香は一切訊かず、夢乃の曲の才能を褒めちぎった。

「私のことはいいから。人生を楽しくするチャンスをふいにしちや  
ダメだよ」

皮肉も恨みもない、高校時代から常に横にいた明日香がそこにい

た。

……と思っていたのは、夢乃だけだった。

一週間後、明日香はメッセージアプリを使って、一方的に「しいちきん・マスタード」の解散を告げてきた。夢乃は忙しくなるし、いつまでも遊びでこんなことを続けられないでしょ。ただそれだけだった。

返信したが既読はつかず、通話はブロックされていた。動画チャンネルは、管理をしていた明日香によってすでに削除されていた。こうなったら家まで押しかけて話をしよう……その気持ちに、すぐに歯止めがかかった。

明日香の両親は、動画配信に猛反対していたはずだ。両親に明日香はうんざりしていた。家に押しかけて明日香に合わせてほしいといっても門前払いを食らうに決まっている。いや、その煩わしさを振り払ってもここは明日香に会うべきでは……。

面倒だ、という感情が頭をもたげた。

もともと《イエローレイン》は夢乃の楽曲にしか興味がなかったのだ。今さら行って、何を話せばいいというのだろう。思い起こせば明日香は、自分の思い通りにならないとがあると激高して手が付けられなくなるくらい怒鳴り散らすことがあった。動画の方向性でも何度かヒステリックな態度を取られたことがある。

辞めるいいきつかけなのかもしれない。

そうだ。私はもう十分、一人でやっていける。明日香とのことは、私がステップアップするために必要なプロセスに過ぎなかったのだ。

明日香はもう、邪魔だ。じやま

後ろめたさを振り払うように、夢乃は新曲の作成に没頭した。専門学校のほうの勉強はまったく手つかずで、テストの成績は惨憺さんたんたるものに終わったが、できた楽曲は本田には好評だった。提供されたアイドルグループはチャーミングなパフォーマンスを完成させ、夢乃の曲は世に出てちよっとしたブームになった。

あれよあれよというまに、舞台の音楽制作の手伝いを任されるようになり、アニメの挿入音楽やコマーシャルソングを手掛けるようになり、専門学校をやめて音楽業界で生きていけるようになった。相変わらず作曲理論なんて何もわからないけれど、古色蒼然こしよ蒼然としたセオリーより、最新のアプリを使いこなす技術のほうがずっと役に立つことがわかっていった。

仕事は途切れることなくむしろ増える一方で……いつのまにか、十年が経っていた。

先週、夢乃のアカウントにダイレクトメッセージが送られてきた。「しいちきん」というそのハンドルネームに、夢乃は思わず「あつ」と言ってしまった。

久しぶり。活躍をととても嬉しい気持ちで見ているよ。

それだけのメッセージだったけれど、夢乃の中になんとも言えない感情がこみあげてきた。懐かしさというよりは罪悪感だった。今の生活はとても充実している。だけど、そのきっかけを与えてくれた友人を、ずっとほったらかしにしていた。

無視はできなかった。夢乃が返事をする、すぐにまた返信があった。明日香はもうすっぱり音楽からは足を洗い、ウェブデザイン関係の仕事をしているらしい。実家を出て一人暮らしをしているとのことだった。

何度かやり取りをするうち、「会いたい」と明日香は言ってきた。できれば、夜通し飲み明かしたい。昔みたいに、ああでもないこうでもないといたら話しながら――

夢乃も同意した。すると、自分の住んでいるアパートまで来てほしいと明日香は住所を送って来た。

地図アプリで確認すると、周りに畑の多い片田舎だった。都心から二時間弱、どんなところに住んでいるのだろう――振り返ればそのときから嫌な予感がしていたのかもしれない。

それでも納期の迫った仕事を三つ無理やり終わらせて時間を作った。あまり乗ったことのない私鉄に乗り、名前も聞いたことのない駅で降りる。三十分待つてようやくやってきたバスに乗り、さらに

二十分。バスに降りて《マカベイ・マート》の看板が目に入った。一応、手土産は持ってきているが、夜を明かすつもりなのにお酒もおつまみも持っていないのは気恥ずかしい。名前を聞いたこともないそのコンビニでいくつか見繕い、徒歩五分でそのアパートに着いた。

意外といつては失礼だが、築浅の、豪華な見た目のアパートだった。二階建てで、一階と二階、ともに二世帯分の入口しかない。建物の大きさからみて、一部屋はだいぶ広そうだ。

広い部屋に住みたくてこんな辺鄙なところに住んでいるのだろうかと思いつながらインターホンを鳴らした。

そのときまだ、夢乃は知る由もなかった。友人が、十年前とは似ても似つかない、変わり果てた姿で出てくることに――。

2、

ぶっ、ぼー、そう ぶっ、ぼー、そう

ぶっ、ぼー、ぶっ、ぼー、ぶっ、ぼー、そう

イヤホンから耳に流れてくる音声を聞きながら、音程を整えていく。

日常でふと聞こえてきた音やリズムを取り入れて音楽を作る、と

いうことを始めたのは三年ぐらい前のことだ。予定調和な曲作りに飽き飽きしていたので、思いのほかい曲ができるのだった。

ぶっ、ぽー、そうぶっ、ぽー、そう

ぶっ、ぽー、ぶっ、ぽー、ぶっ、ぽー、そう

やっぱりジャズアレンジにして正解だった。ライブイベントのBGMでもよさそうだけれど、CMのほうが実入りはいい。まずはプランナーの石坂いしざかさんに聞かせてみよう……などと思っていたら突然、ぐらぐらと肩を揺すぶられた。

タブレットからぱっと顔を上げる。

すぐ脇に、男の子が立っていた。

十二歳くらいだろう。眉をひそめて、夢乃の顔をじっと見つめている。

(何……?)

夢乃はイヤホンを耳から外し、腕時計に目を落とす。二時五十七分。

周りを見回しても誰もいない。ぐわらんぐわらんと洗濯物が乾燥される音が響く深夜のコインランドリーに、夢乃と男の子、二人きりだ。

「どうしたの？」

話しかけたあとで、彼の様子がさらにおかしいことに気づく。上

下、かつちりしたスーツ姿なのだ。いや、スーツというよりタキシードといったほうが正しいだろうか。妙に格式ばった、古い時代のパーティーで着用するような服だ。髪の毛をびっちり整髪料で七三分けに固め、まるで濡ぬれているかのように光をはじいている。

「失礼ですが、こちらの席をお譲りいただけませんか？」

やけに慇懃な感じで、彼は言った。

「ただいまより、お嬢様が参りますので」

「えっ?」

夢乃は思わず彼を睨にらみつけてしまう。席を譲れ、だって?

「他に座れるところはたくさんあるでしょ」

向かいのソファを指さすが、

「お嬢様は高貴なお家柄の方ですので、身分の違う方の同席は困ります」

何の冗談なのか、彼はまじめ腐った顔で言ってくる。

「遊びに付き合ってる暇はないの。そもそもこんな時間に出歩くなんて……」

寒気を感じた。吹き付けてくる寒風とは違う、体内に冷凍装置でも設置されたかのような感覚だった。

「そちらへ」

タキシードの男の子は、有無を言わさぬ雰囲気洗濯機の前に二



つ並んだパイプ椅子を指さした。夢乃はイヤホンの刺さったタブレットとバッグを持って立ち上がり、パイプ椅子に移動する。その手元を、男の子は見つめている。

「何をなさっていたのですか？」

「……作曲よ。私は、音楽を作るのが仕事だから」

男の子は意外にも「ほう」と関心をひかれたようだった。

「それで作曲ができるのですか」

詳しくない人間に説明するのは苦手なほうだ。タブレットからイヤホンを抜き、再生ボタンを押す。

ぶっ、ぽー、そう ぶっ、ぽー、そう

ぶっ、ぽー、ぶっ、ぽー、ぶっ、ぽー、そう

ここへ来て三十分ばかりで作曲したのだと告げると、いよいよ彼は興味を掻き立てられたようだ。

「しかし、ピアノの音も聞こえます。どうやって演奏したのですか？」

「楽器の音が元から入ってる」

「元から？」

「そう。それだけじゃなくて音声も。動物の鳴き声とか、自然の音もたくさん入ってる」

その後、いろいろ彼の質問に答えていると、がらりとガラス戸が開いた。

体はいくらか大きいが、やはり十二歳くらいのタキシード姿の男の子が二人、立っていた。その二人についてしずしずと入ってくる影がある。

ドレスを着た、七歳くらいの女の子だった。

「お嬢様、お待ちしておりました」

初めに来た男の子が恭うやうやしく頭を下げた。

深夜のコインランドリーのちんにゆうしやの闖入者たち。

明日香にとって自分自身も、日常の闖入者だったのかもしれないと、夢乃は考えていた。

\*

「いらっしやい」

ドアを開けてひよっこりと出てきたその顔を見て、夢乃は思わずあとじさってしまった。秋の枯れ野のように乱れた髪はの毛、腫れぼったい目、二重あご――。

「明日香……?」

「そうよ。だいぶ変わったでしょ?」

荒れた頬をぼりぼりと搔きながら彼女は笑う。高校時代には絶対に着なかった、灰色のよれよれのスウェットなんか着ている。

「あれ、なんか買ってきてくれたの？ お酒も食べ物も用意したのに悪かったなあ。……ほら、突っ立ってないで、入って入って」  
話口調が十年前とまったく変わらずサバサバしているのが、却かえって不気味だった。

廊下は、薄暗かった。壁際に脱ぎ捨てた洋服やお菓子の袋、何かの空き箱、雑誌類などが散乱している。

「ごめんね汚くて。ウェブデザインなんてしていると外に出なくって散らかっちゃって」

かろうじて見えているフロアリングの道をそのそと歩いていく明日香の後ろ姿は、岩のようにぼてっとしていて、まるで三十前の女には見えない。

通されたダイニングがまた、ひどかった。

ドアを入った両側の壁には段ボールや紙袋、ゴミ袋がうず高く積みまれている。正面はキッチンだが、空気がどんよりしていて、普段自炊なんてしていないだろうことは雰囲気でもわかった。部屋の中央にはテーブルがあり、ピザの箱が二つと、寿司の入ったプラスチックケースがある。

「わあ、すごくかわいいそのニットカーディガン。サーモンピンク、昔から似合ってたもんね、夢乃は」

コートを脱いだ夢乃の服装を、明日香は褒めた。人に勧められて

先週買ったお気に入りだ。本当はベビーピンクという色だけれど、灰色のスウェットの明日香に言ってもしょうがない。

「ありがとう」

「ピザとお寿司。好きでしょ夢乃。今夜は宴じゃ、ははは」

おどけたように言っ、明日香は冷蔵庫から缶ビールを二本、運んできた。

乾杯をして、食事をしながら明日香は近況について話し始めた。大学を卒業してすぐに就職をした企業でうまくいかず、悩んでいたところ、知り合いに誘われてウェブデザインの仕事を始めた。人と顔を合わせなくても仕事ができる気楽さにすっかり魅了みりようされ、鬱陶うつどうしい両親とも離れ、一人暮らしを謳歌おうかしながら毎日気楽に過ごしている——おおむね、ダイレクトメッセージで聞いていた通りのことだった。

「2LDKよ」

夢乃が黙っていると、明日香は聞かれてもいない部屋の間取りを言った。

「廊下をはさんで向こうに仕事部屋と寝室があるわ。まあ、このダイニングと似たような状態。でもまあ来週、一気に片付ける予定だから」

自分に向けられた明日香の目が、やけに充血しているのに夢乃は

気づいた。

「こんな状態のわりに、臭いは気にならないでしょう？ 洗濯だつてしつかりやつてるんだから。近くに、コインランドリーがあつてね。フォルダー機能ついでいって、乾燥したあと、ちゃんと畳んでくれるのよ。便利だよね」

口元は笑っているが、目が全然笑っていないかった。

「ねえ私ばかりしゃべってる。夢乃もなんかしゃべってよ」

「ああ……」

夢乃の充実した生活については何も話さないほうがいい。そう直感した。今の夢乃と明日香の間には大きな隔へだたりができてしまった。「しいちきん・マスタード」の思い出話もやめたほうがいいだろう。でもそれなら何を話せばいいのか……。

「ピザ見てたら思い出しちゃった」

ピザをひと切れ手に取って、ごく自然に聞こえるように言った。

「同じクラスだった小川くんおがわ。いっつもお弁当にピザもってきてたよね？」

「ああ、小川ね！ なかの中野ちゃんと付き合ってた」  
思いのほか食いついてきた。

「付き合ってたって言っても、二週間だけだよ」

「えーそうだったけ？」

その後も話題は高校時代の学校の思い出に終始した。双方に無害な話題は二人のあいだから気まずさを取っ払っていった。アルコールも入るとリラククスし、昔のように明日香が放つ冗談に突っ込みを入れる余裕もできた。

その調子で、朝まで過ごしていればよかったのに。

3、

夢乃の背後でいつしか、洗濯機は乾燥を終えていた。ぐわらんぐわらんという音はやみ、代わりにぶふおっという空気圧と、かちやかちや金属同士が触れ合う音に代わっていた。大きな鉄の箱の中でシャツが舞い上がり、無数のアームがそれをたたみ、所定の引き出しの中に収める様子が、頭の中で再現される。

だけどそんなことより、目の前で繰り広げられる奇妙な光景――。

「鴨のローストでございます」

ドレス姿の七歳くらいの「お嬢様」の前に、料理の載った皿が供される。「お嬢様」はナイフとフォークを優雅に操りそれを食べ、「オリーブオイルは何を？」などと質問している。声もまるで子どもだけれど、シェフとのやりとりしぐさのひとつひとつが、金持ちの令嬢といった感じだった。

シェフといっても、やっぱり小学生くらいの子だ。タキシード姿の三人の男の子は夢乃のすぐそばに並んで、「お嬢様」を見守っている。開け放たれたガラス戸の向こうからソムリエの男の子がやってきて、グラスに赤い何かを注ぐ。まさかワインではないだろうけれど……その色は高級さをたたえている。料理もすべて本物だ。

(なにこれ)

ソムリエ君の後姿を見送り、不意に、おかしくなった。

(絶対、夢じゃん)

深夜のコインランドリーに、子どもがたくさん。誰もが大人びていて、高貴そうな「お嬢様」はディナーを楽しんでいる。ありえない。変すぎる。

(だいたい、料理はどこで作ってるの？ 外に、キッチンでもあるの？)

「里村」

突然、「お嬢様」が、言った。一番初めに夢乃の前に現れた男の子のほうを向いている。

「いかがしましたか、お嬢様」

「せっかく素敵なディナーなのに、音楽がないわ」

「音楽ですか。たしかに」

里村と呼ばれた男の子は困ったような顔をしていたが、はっとし

た様子で夢乃のほうを見た。

「お嬢様、こちらのお方は作曲家の先生だそうです」

「いや、先生というほどじゃ……」

「先生、ぜひ先ほどの音楽を」

「お嬢様」は何も言わず、期待の目を夢乃に向けている。どうせ夢なのだからいいか、と、夢乃はタブレットに目を落としました。

「さっきの音楽よりもっと、ディナーの雰囲気合うものがないわよね」

「いえ、さっきの音楽がいいかと存じます」

「でも」

「ぜひ」

里村は妙に強い態度だった。どうでもいい。どうせ夢なんだから。

夢乃は開かれたままのアプリの再生ボタンをタップした。

ぶっ、ぼー、そう、ぶっ、ぼー、そう

ぶっ、ぼー、ぶっ、ぼー、ぶっ、ぼー、そう……

\*

「ねえ夢乃、ちょっと私の仕事場、見てみる？」

時計の針が一時をすぎて話が途切れがちになったところで、明日



香が言った。

「うん。見てみたい」

アルコールで気持ちよくなっていた夢乃は応じた。

仕事場はダイニングから廊下をはさんで向かい側の部屋だった。

ドアを開き、電気をつけた。

四畳半にも満たない小さな部屋。スチール製のデスクの上にデスクトップPC……。だがやはり夢乃が気になったのは、部屋中に積まれたゴミ袋だった。半透明の袋の中、カップ麺やピザのケースが、ぐちゃりとしたヘドロのようなものと一緒になっている。デスクの下に消臭剤が十ほど並べられているが、その芳香と生ごみの臭いが入り混じって、むしろ頭が痛くなるような臭気を醸し出しているのだった。

「ごめん」

夢乃は思わず廊下に飛び出て、ゴミにつまづきそうになりながらトイレに駆け込んだ。便器を抱えて、えづく。すんでのところで嘔吐はしなかったが、胸のなかにはまだ汚れた空気がよどんでいるようだった。鼻から思い切り息を吸い込み、また気持ち悪くなる。

夢乃は忘れていた。この家は、トイレまでも汚れ切っている。便器はもう黄ばみを通り越してどす黒く、カビともホコリともつかないものが水に浮いている。

「夢乃……」

追いかけてきた明日香が、声をかけてきていた。

「もう、限界！」

気づいたら夢乃は叫んでいた。

「ねえ明日香、お願いだからちゃんと片付けよう。もっと人らしい生活をしようよ」

丸太のように太い足にしがみついた。

「……人らしい生活って、何？」

低い声で明日香は訊ねた。

「芸能事務所でその才能をお金に換える器用さも持ち合わせていない私に、人らしい生活なんてできないって？」

見上げると、さつきよりも充血した目が、夢乃に向けられている。

不気味さと悪寒おかんと怒りが綱交なймаぜになり、怒りが勝った。

「そういうこと、言っただんじやないでしょ！」

立ち上がって明日香を突き飛ばした。明日香は太った体をよろめかせ、壁に背中をどんとぶつけた。

「何よ、卑屈ひくつになって！ 私が認められたのは私の感性が業界に求められていたからよ。明日香だって、自分の好きな音楽つらぬを貰もらえば、いつか私と同じ世界で働いていたかもしれないのに」

「……勝手なこと言わないで」

明日香はつぶやくように言った。

「あんただけが認められて、私は音楽ができなくなった。何日も何か月も、一人で部屋で引きこもっていた。屈辱くつじやくと悲しさで、動画をやっていた日々を全部消したくて消したくてしようがなかった。就職したつてうまくいかないのは当たり前。ずーっと、人と話していなかったんだから」

一歩、二歩と、夢乃に近づいてくる。

「ゴミが散らかっていたってね、私は一人で暮らしていけるの。これでもしっかり独立してるの。私は、私は……いたっ！」

伸ばされてくる右手を、夢乃は平手打ちをするように払った。呻うぶく明日香に、謝る気にはなれなかった。

「消したい！」

明日香は驚くほど機敏きびんな動きで、再び襲い掛かってきた。夢乃のニットカーディガンの首元をつかみ、「消したい消したい消したい、あんとあの思い出全部消したい！」と揺すぶってくる。そして夢乃の体を、ゴミ袋の上に放り投げた。かろうじて両手で体を支える、そのとき夢乃は、右手が何か硬いものに触れるのを感じた。夢乃は必死の思いでそれを引っ張り出す。一メートルくらいの、ステンレスの棒だった。

「あんとあの思い出、ぜんぶぜんぶぜんぶ、消したいの！」

髪を振り乱してのしかかってくる灰色の塊<sup>かたまり</sup>。その怪物の頭めがけて、夢乃は棒を思い切り振り下ろした。

4、

「この曲で繰り返される『ブツポーソウ』という言葉、最近聴いたものかしら？」

しばらく食事を楽しんでいたかと思うと、「お嬢様」は不意にナイフとフォークを置いて夢乃のほうを向いた。タブレットからはまだ、夢乃が作曲したばかりの曲がエンドレスで流れ続けている。

「ええと……ええ、そうよ」

彼女の雰囲気引つ張られるように、気取った口調になってしまった。

「今夜、このランドリーに来るあいだに。鳥の声かと思っただけ  
「ど」

「お嬢様」は口元に笑みを浮かべ、三人のタキシードの男の子たちに目くばせをする。彼らもまた、意味ありげに顔を見合わせている。

「それで、私たちと会えたのですね」

夢乃は意味がわからない。

「どういこうと？」

「まだ、気づいていないのね。その恰好かつこうということは、部屋の中で…  
…でしょう。ここに導かれる理由があったはずですよ」

達観たつかんしたような口調で、次々とわけのわからないことを言っている。その恰好…と自分の着ている服を見て、夢乃は首をかしげる。先週買った、ベビーピンクのニットカーディガン。別におかしいことではない。…いや、待って。

「私、コート、どうしたんだろう？」

「それだけじゃない。足元もよ」

「お嬢様」に言われて足元を見る。靴を履はいていない。靴を履かずに外を歩いてきた？ コートを着ていなかったのに、なんで寒くなかったんだろう。それにバッグは？

「どうしてこんな時間に、自分がコインランドリーなんかにいると思うの？」

「それは、友だちの家に泊まる予定だったけれど、喧嘩けんかして追い出されて」

「友だちの家を出るときの、記憶があいまいじゃないかしら？」

夢乃は頭を抱かかえた。

明日香に金属の棒を振り下ろしたあとの記憶がはっきりしない。

(どうして？ どうして、私…)

ぴーっ、と背後で音が鳴った。振り返ると、洗濯機のディスプレイに「たたみ完了／すべての工程が終了しました」とメッセージが出ている。

「引き出しを開けてごらんさい。そうすれば、わかるわ」

「お嬢様」は言った。

夢乃は引き出しに手をかけ、一気に引き開けた。洗濯・乾燥・たたみが終わったばかりの洗濯ものが重なっている。いちばん上は、今、夢乃が着ているニットカーディガンだった。

「どうして……？」

視界が歪ゆがんでいく。タキシードの男の子たちは憐あわれむように夢乃を見ている。

ぶっ、ぽー、そうぶっ、ぽー、そう

ぶっ、ぽー、ぶっ、ぽー、ぶっ、ぽー、そう……

5、

午前四時——。

浜地明日香はまだ暗い畑の中の道を歩いていく。《マカベイ・マー

ト◇はまた営業を開始しておらず、人っこ一人歩いていない。  
びゅう、と寒風が吹く。

「さむっ！」

マフラーを口元に上げようとして、脇わきの下が痛くなった。

夢乃のコート。袖だけ無理やり通したけれど、ボタンはまったく留められない。高校時代は私のほうが痩やせていたのにと、また腹立たしくなる。

まあいい——今や彼女は、裸で明日香の部屋に転がっているのだから。

久しぶりに会いに来てくれたのは素直に嬉しかったし、飲みながら話しているときは本当に高校生に戻ったように楽しかった。何の屈託もなく、明日香の心の歪ゆがみもまっすぐになるようだった。

だけど違った。

やっぱり彼女は、一人成功した高みから、明日香の人生をゴミのようだと見下していた。人の仕事場を見て、トイレで吐いて、素人のくせに説教をした。頭に血が上って、そのあと何と言ったのかは覚えていない。気づけば夢乃が、明日香に向かって棒を振り下ろしていた。

とっさにそれを掴つかんだ。いつかネットで買ったまま放り出してあったステンレスの突っ張り棒だ。力を入れると、簡単に夢乃から奪

い取ることができた。

「やめて……」

恐怖におののく夢乃の頭に、それを振り下ろした。

「あぐっ」

その頭に、何度打ち付けたのかは覚えていない。気づけばゴミ袋の上で夢乃は、血まみれで動かなくなっていた。

もったいない。

我に返ってすぐ明日香が抱いたのはそんな感情だった。夢乃の着ているサーモンピンクのニットカーディガン。コートを脱いだときからすごく可愛いと思っていた。私のほうが絶対に似合う。夢乃の血で汚れてしまったてはもったいない。明日香はすぐに夢乃の体から引きはがして、いつも《BPSランドリー》に行くときのエコバッグに入れた。それからすぐに着替えて、返り血まみれの自分のスウェットもエコバッグに放りこんですぐに家を出た。

深夜の《BPSランドリー》には誰もおらず、五台の洗濯機も眠った状態だった。明日香は一号機に洗い物を放り込み、液体洗剤と柔軟剤を所定の場所に入れ、「乾燥・畳みモード」に設定してコインを入れる。

すぐに部屋に取って返し、夢乃の死体をカビだらけの浴室に運んだ。解体したほうが捨てやすいかと思っただけだけれど、すぐにそ



んな重労働はごめんだと思い直した。薬品で溶かすのはどうだろうかと思ひ、仕事場でネット検索をかけた。

うまい薬品が見つからず、気づけば三時五十五分だった。「乾燥・たたみモード」は二時間三十分あまり。人目につかないよう、できれば終わった直後のタイミングで回収しておきたかった。それで、夢乃のコートに袖を通し、空のエコバッグをつかんで外に出たのだった。

《BPSランドリー》についたときにはすでに、夢乃のコートは小脇に抱えた状態だった。寒いよりきついほうがましだろうと思っていたが、逆だった。この体では、冬の差し迫ったこの時期の朝だつて、少し歩けば額に汗をかく。

1号機は止まっついて、「畳み完了ランプ」がついていた。

乾燥ばかりか畳んでくれるなんて本当に便利。家事なんて一秒もやっていたくない明日香には最高の洗濯機だ。ソファアの上に袋とコートを置き、出来上がった洗濯物が入っている引き出しの取っ手を握る。

引き開けて、「あれ？」と声が出た。

一番上に畳まれているのは、夢乃のニットカーディガンだ。ただ、その上に変な物が乗っている。

タブレットだった。

誰かが置いていったのだろうか？ 引き出しに鍵はついていないから可能だ。けどどうしてわざわざこんなものを。

開かれているのが作曲アプリだというのはすぐにわかった。もう何年も触っていないけれど、動画チャンネルをやっていたときには毎日使っていた。バージョンはかなりアップされているけれど、基本的に使い方は同じのはずだ。

すでに作曲された何かの曲の波形が映し出されている。

再生の「▶」が、誘っているような気がした。

誰の、何という曲だろう。こんなアプリもう二度と見たくないと思っていたのに、妙に興味が引かれていく。

再生するな、と冷静な脳が言う。

だが、明日香の中に生まれた衝動は止まらない。

明日香は手を伸ばし、人差し指で、再生マークをタップした――。

(終)